

ジョン・ダンの詩における「永遠」の 象徴としての「円」について

竹 永 雄 二

(英米文学研究室)

はじめに

17世紀の図形象徴では、人間は直線で表わされ神は円で表わされる。つまり円は完全性の象徴であるが、完全性の属性である永遠性もまた円によって象徴されるものと考えられることができる。このような視点からダンの詩に着目すると、主として三つの円に類別される。(1)始めと終わりが一つになるもの、(2)始めと終わりが一つにならないもの、(3)始めと終わりが一つになるかどうかわからないもの、の三つである。(1)の例は有名なコンパスのアレゴリカルな動きによって愛の完全性と永遠性を表わそうとした『別れ、嘆きを禁じて』という詩に、(2)は新天文学の発達によって伝統的な世界観、宇宙観に亀裂が生じたことを表わした『一周年記念』の中に、(3)は晩年の重病を西回りの世界一周の航海であると捉え、死が復活につながることを表わそうとした『私の神への賛歌——私の病気の中で』の中に指摘できる。

伝統的な恋愛詩にみられる美の破壊者としての「時の翁」はダンの詩の中にほとんど登場して来ないが、ダンの時間の意識、そして永遠の希求は彼特有の形而上的表われ方をしており、その一つが円であると思われる。

(1)

前にも述べたように、この時代の図形象徴では円は神を表わし、直線は人間を表わす。神の円の中心はあまねく全ての物の中に存在し、その円は全ての物を含むといわれる。また神は「始めにして終わり」という、時間を超越した永遠の存在である。つまり円は空間的には神の遍在性、無限の広がりを表わし、時間的には神の永遠性を表わしている。円の空間的な広がり具体例はミルトンの『失樂園』の中の神の天地創造の場面に見ることができる。ここでは神は黄金のコンパスをもって地球を中心として円を描き、その円周の内側を「世界」とし、その外を「混沌」と定めたと言われている。

and in his hand

He took the gold'n Compasses, prepar'd
In Gods Eternal store, to circumscribe
This Universe, and all created things;
One foot he centerd, and the other turnd

Round through the vast profunditie obscure,
 And said, Thus farr extend, thus farr thy bounds,
 This be thy just Circumference, O World.

(1

永遠性の象徴としての円の最も有名な例はヘンリー・ヴォーンの『世界』という詩に見ることができる。そこでは永遠は巨大な光の輪であり、その中で天体が回って時を造り、そしてその時の影の中に世界が閉じ込められていると表わされている。

I saw Eternity the other night
 Like a great *Ring* of pure and endless light,
 All calm, as it was bright,
 And round beneath it, Time in hours, days, years
 Driven by the spheres
 Like a vast shadow moved, in which the world
 And all her train were hurled;

(2

対照的に直線は、人間の限界、終わりある生命を表わす。運命の女神がそれぞれの人間の運命の糸を紡ぎ、繰り出し、最後に切断するといわれている神話も、このことをよく象徴している。シェイクスピアは『ソネット集』の中で美の破壊者である「時の翁」に対抗して彼が愛する青年の美を永遠化するために、結婚によって子孫を残すこと、詩に表わして後世に伝えること、という二つの方法をあげているが、その二つの意味が‘lines’(家系、詩の行)という単語でソネット18番に表わされている。

Shall I compare thee to a summer's day?
 Thou art more lovely and more temperate:
 Rough winds do shake the darling buds of May,
 And summer's lease hath all too short a date:
 Sometimes too hot the eye of heaven shines,
 And often is his gold complexion dimm'd,
 And every fair from fair sometime declines,
 By chance or nature's changing course untrimm'd:
 But thy eternal summer shall not fade
 Nor lose possession of that fair thou ow'st,
 Nor shall Death brag thou wander'st in his shade,
 When in eternal lines to time thou grow'st:
 So long as men can breathe or eyes can see,
 So long lives this, and this gives life to thee.

(3

しかしそれは最後のカプレットが示すように、人間が息をし、そして目が見える限りの永遠化でしかないこと、人間の終末をこえることはできない制約された永遠化である。このような詩の全体的意味は人間の限りある生命を象徴する直線（lines）という言葉の中に既に内包されているように思える。

T. S. エリオットは『形而上詩人論』の中で、イメージの対照が効果的であるとして、ダンの「骨のまわりの金髪の腕輪」(A bracelet of bright haire about the bone) という表現をあげているが、⁴視覚的な生と死のコントラストと同時に、骨という直線を金髪が円となつてぐるりと囲むという、図形的視点で見ることでもできるだろう。直線と円との結合によつて、死後の世界まで続く男女の深い絆を表わしていると考えられることもできる。

さて、17世紀はM・ニコルソンのすぐれた先行研究『円の破たん』(The Breaking of the Circle)⁵が示すように、旧世界観から新しい世界観への過渡的な時代であったがゆえに象徴としての円は、特に重要な意味をもつ。ニコルソンは完全性の象徴である円(Circle of Perfection)が、17世紀の英詩の中で隆盛、衰退、消滅していくという推移の中に、小世界、大世界の緊密な対応に基づく旧世界観から、理性に基づく新しい世界観への変化を証明しようとしている。拙論も彼女のこのような規模の大きな研究に大いに恩恵をこうむっているわけであるが、ここでは視野をもう少し狭めて、ダンの詩に表わされた円の軌跡の中に、時間と永遠の問題を検討してみたい。

(2)

まずダンにおける時間と円の問題を *Songs and Sonnets* の中の『日の出』(The Sun Rising) という詩に求めてみたい。この詩では、時間は恋愛にとって社会的な制約を課する邪魔物と捉えられている。ゆえに恋人とともにベッドにやすらう語り手は、朝になってカーテンの間から射し込んで来る太陽を、「忙しげなよぼよぼの愚か者、手におえない太陽」(Busy old fool, unruly sun) と攻撃的に呼んでいる。そして恋人達の時間は太陽の動きに合わせる必要はないのだから、自分達のところを訪れる代わりに「朝寝坊の小学生、眠けまなこの奉行人をしっかりといけばよい、王様の乗馬を宮廷の乗馬係に知らせたり、田舎の働き者達を収穫の仕事に呼びだせばよい」とダン特有の辛らつな表現で太陽に命令した後で、完璧な愛は時間とは無縁であることを次のように主張している。

Love, all alike, no season knowes, nor clyme,
Not houres, dayes, months, which are the rags of time.

6)

ここでの'all alike'という表現には四大元素、または四つの体液が全て等しく混じり合ったものは滅びることがないというスコラ哲学の概念が利用されている。不完全な愛に伴う不安、恐れ、嫉妬、憎しみ等不純な要素の無い完璧に調和した愛は時間による変化を被ることがないという意味だろう。そしてこの詩の最後で何も欠けることのないこの愛は世界そのものであるから、自分達のベッドを中心にこの部屋をその軌道として回るようにと太陽に命令することによって、社会的制約を意味する時間を恋愛に従属させようとしている。

Thine age askes ease, and since thy duties bee
 To warme the world, that's done in warming us.
 Shine here to us, and thou art every where;
 This bed thy center is, these walls, thy spheare.

この「小さな部屋」が「世界」という、小世界、大世界の対応を利用した、ある意味では強引な論理は巧妙であり、かつダンの魅力ではあるが、本当の意味で時を克服したとは誰も思わないだろう。社会的義務より恋愛の快樂的側面を優位におこうとしていること、そして筋が通りにくいことを正当化しようとしているからである。この恋人達の部屋の中を回る太陽の円軌道は外の現実世界に対して閉ざされた空間、閉ざされた時間をつくるもののように思える。

さて、今ここで問題にしている円、または円のイメージは使われていないが、恋愛の世界と外の現実世界との不調和、対立は、有名な『聖徒加入』(*The Cannonization*)という詩の中にさらに際立った形で表現されている。社会的な栄達の道からはずれてしまうことがあっても、純粋な恋愛に生きることは現実的価値観に勝るものであり、永遠の生命を獲得するためにむしろ愛の殉教者の道を選ぶとこの詩の語り手は、将来をきづかって忠告する友人の言葉を激しい口調でしりぞけている。そして自分達の住む世界は「ソネットの中の美しい部屋」(*in sonnets pretty rooms*)、「見事に造られた骨つぼ」(*a well wrought urn*)だと主張している。しかし、「ソネットの中の美しい部屋」という表現にシェイクスピアが『ソネット集』で主張した芸術による美の永遠化を、また「見事に造られた骨つぼ」に、後にキーツが「ギリシアのつぼ」に見た美と真実が一体化した永遠性と同じものを感じることができるだろうか。思想的類似性は認められても、情感の純粋性に差違があるように思える。この詩の終わりで語り手は、愛の殉教者である自分達は聖人に加えられて、後世の人々に愛の「手本」(*a pattern*)とあがめられるようになるだろうと主張している。あまりに現実を意識しすぎて、愛の世界と現実世界の優劣にこだわりすぎて、逆に愛そのものの戯画化、道化化が感じられてしまう。このような意味では、『日の出』と同じように「ソネットの中の美しい部屋」も「見事に造られた骨つぼ」も閉ざされた空間、閉ざされた時間であるように思える。

このような愛の世界と現実世界の離反、対立の解決、そして開かれた空間、開かれた時間はこれも有名な『別れ、嘆きを禁じて』(*A Valediction: forbidding Mourning*)という詩の中のコンパスが描き出す円に求めることができる。ダンの伝記を書いたアイザック・ウォルトンによれば、この詩はダンがドルアリ卿に随行して大陸旅行に出かける際、妻アンとの別れを表わしたものだという。⁷詩全体に歳下の女性をいたわるような優しい調子があるのも、このような事実と符合しているように思える。またドリアリ卿の経済的援助が、それまでの秘密結婚に端を発した苦しいダン一家の窮乏生活に、一応の安定を与えることになったという伝記的事実も重要であろう。

この詩の終わり三連で、たとえ一時期離れ離れになっても、愛し合う者同士の間は絶えず一つであるという心情が、コンパスのアレゴリカルな動きによって表わされている。

If they be two, they are two so
 As stiffe twin compasses are two,

Thy soule the fixt foot, makes no show
To move, but doth, if the'other doe.

And though it in the center sit,
Yet when the other far doth rome,
It leanes, and hearkens after it,
And growes erect, as it comes home.

Such wilt thou be to mee, who must
Like th'other foot, obliquely runne;
Thy firmnes makes my circle just,
And makes me end, where I begunne.

このコンパスの動きは二つある。一つはコンパスの二つの軸の左右対称の横への広がりである。「それは（コンパスの片方の足である男を送り出す女性）中心にあっても、もう片方のコンパスの軸（仕事で外国に出かける男）が遠くへ足を伸ばせば、軸を傾け、その消息をきづかい、片方がもとのところへ帰って来ると身をこす」というように、たとえ離れても絶えず不在の相手のことをきづかう愛し合う者同士の調和した心の動きを表わしている。コンパスのもう一つの動きは円運動であり、円の中心となる女性の軸がしっかりしたもの（firmnes）である時、もう片方の足である男の動きは、変化しながら（'obliquely'には必要にせまられた仕事と同時に男の浮気が暗示されているかも知れない）も「始まったところで終わる」（end, where I begunne）完全な円となる。この動きは勿論愛の不変性、永遠性の象徴である。このコンパスの横への広がり円運動の二つの組み合わせは今までにない柔軟な意味をもつ。それは現実生活の必要に対応しながらかつ愛の世界の完全性を維持するという態度を示している。それは愛の世界と外の現実世界の調和であり、外の世界を強く拒否した『日の出』の円と比べれば、空間的にも時間的にも開かれた円であるということができよう。

(3)

次にダンの中期の作品『周年記念』（*The Anniversaries*）の中に円と時間の問題を考えてみよう。ダンが「女性の理想」（*Idea of a Woman*）を書いたのだというこの詩の中で、16歳で死んだエリザベス・ドルアリを理想化するための象徴表現の一つとして円が使われている。「彼女の均整のとれた美しさに比べれば球は不安定で、円は角ばっている」

To whose proportions if we would compare
Cubes, th'are unstable; Circles, Angulare;

(8

と彼女の美しさが一般的には完全性の象徴である球、円をこえたものであると表わされ、「彼女は完全性を十分に育てることにより、円を拡大し、なおそれを保持しながら、完全性（円）に慕われ、かつ完全性を慕って天に行ってしまった。そしてそこで完全性を与えられ、かつ

増やすのである」

Shee, who by making full perfection grow,
Peeces a Circle, and still keeps it so,
Long'd for, and longing for'it, to heaven is gone,
Where shee receives, and gives addition.

と彼女と円との関係が育てる、慕われ慕う、受け入れ増やすといった母親と子供、恋人同士、夫婦という動的な関係で表わされている。

さてこの作品（特に *The First Anniversary*）が注目を浴びているのは、その中に新天文学の影響が表わされているからである。しかしそれは美、徳、善、そしてあらゆる価値の具現者である少女、地上と神の世界を結ぶ「鎖」（link）であった少女の死により、人間、地上、さらに宇宙にも狂いが生じた、言葉を換えれば、円の喪失として否定的な視点で捉えられている。太陽は「その軌道は円軌道ではなくて、円を完成することもできないし、一インチも真直ぐ進むことができない。今日昇ったところに二度と戻らず、人を欺くような軌道を描いてその地点をすり抜けて行く。蛇のように蛇行し、ふらつく足取りで疲れ切っているように見え、人間の方へより近くおりて来て眠ろうとする」

For his course is not round; nor can the Sunne
Perfit a Circle, or maintaine his way
One inche direct; but where he rose to day
He comes no more, but with a cousening line,
Steales by that point, and so is Serpentine:
And seeming weary with his reeling thus,
He meanes to sleepe, being now falne nearer us.

と表わされている。夏至、冬至といった周期的な太陽の運行の変化は、天体観測によって当時既に確かめられていたが、ここではそれは太陽の墮落として捉えられている。‘cousenig line’, ‘Serpentine’, ‘reeling’ といった表現は酒によってふらつく足取りを表わし、‘weary’, ‘sleepe’ は活力の喪失を表わし、‘falen nearer us’ は太陽がその神聖さを失って墮落したことを表わしている。星もまた太陽と同じで「常に円を描いて回っていると自慢していた星も始まったところで終わるものは一つもない。その全体的な均衡はゆがみ、収縮したり膨張したりする」

So, of the starres which boast that they do runne
In Circle still, none ends where he begunne.
All their proportion's lame, it sinks, it swels.

と表わされ、‘lame’, ‘sink’, ‘swels’ といった病的なイメージで星の円軌道の喪失が表わされている。

このような円の破たんを意味する太陽の「昇ったところに二度と戻って来ない」運行や、星の「始まったところで終わらない」運行は時間という視点でみた時どのようなことを意味するのだろうか。それは地上的な時の循環による永続性、季節の周期の乱れを意味するように思う。冬の終わりが春の到来に、死が誕生につながることによって保たれる永続性の否定である。

「雲は雨をはらまず、誕生の時に香わしい雨を降らすことはない。大気は季節をふ化し、全てのものを誕生させるために、母親のように大地にとどまることはない。春は共通の揺りかごであったが今では墓である。偽りの妊娠が全ての子宮を満たしている。」

The clouds conceive not raine, or doe not powre
In the due birth-time, downe the balmy showre.
Th'Ayre doth not motherly sit on the earth,
To hatch her seasons, and give all things birth.
Spring-times were common cradles, but are toombes;
And false-conceptions fill the generall wombs.

上の引用部分にはエリザベス・ドルアリの死により天上と地上との照応（correspondence）が失われ、四大元素（ここでは水と空気）が正常な機能を果たさず、季節が春になっても全ての生命が再び甦る時とならないことが表わされている。

伝記的に言えばこの時期のダンは経済的にも精神的にもどん底であった。T. S. エリオットの『荒地』の冒頭部分を思わせるようなこの引用部分には、ダンの暗い精神状態が反映されているのかもしれない。高い理想と願望を抱きながらも好機を得られず、現実の中で育むことができないこと、ついに心の中でしぼみ、崩れてしまうこと、このような精神状態が不妊、流産のイメージによって表わされているのかもしれない。先に見た初期の恋愛詩には現実から疎外されれば逆に現実を疎外し返すといった囲われた空間、囲われた時間を意味する円が存在した。しかし『周年記念』の中にそのような円を探すことはできない。だが自我への執着を意味するそのような円の破たんは、別の円、さらに大きな円、現象世界を切り捨てて神の世界へと広がりをもつ円を求める契機ともなるのである。

(4)

時と永遠という問題は、最終的には死と復活の問題ということになる。なぜなら、宗教的には現世において永遠性を求めることは不可能であるからである。時の存在しない楽園を墮罪により追放された人間は、墮罪の罰の一つとして現世において時の支配をうけ、時による変化を避けることができない。現世において罪をつぐない、肉体の死とその後続く最後の審判によって罪を赦された者が、天上に復帰し永遠の生命を与えられる、というのが正当的なキリスト教的考え方であろう。ゆえに肉体の死、魂の復活が宗教詩の重要な主題となる。

ジョージ・ハーバートの『復活祭の翼』（*Easter-wings*）という詩には、神の人間の創造、墮罪によりどん底にある現実、そして復活への祈りと希望、つまり過去、現在、未来という人間の歴史（第一の翼）、そしてハーバート自身の人生（第二の翼）が見事に図象化されている。

Lord, who createdst man in wealth and store,
 Though foolishly he lost the same,
 Decaying more and more,
 Till he became
 Most poore:
 With thee
 O let me rise
 As larks, harmoniously,
 And sing this day thy victories:
 Then shall the fall further the flight in me.

My tender age in sorrow did beginne:
 And still with sicknesses and shame
 Thou didst so punish sinne,
 That I became
 Most thinne.
 With thee
 Let me combine
 And feel this day thy victorie:
 For, if I imp my wing on thine,
 Affliction shall advance the flight in me.

(9

ハーバートにとって人間の墮罪とその罰としての「苦しみ」(affliction)は、人間の天上への復歸の「飛翔」(flight)をより遠くへ、より高くするものというように逆説的に捉えられている。苦しみを受容し、それを復活へのバネにするというところに、キリスト教徒としてのハーバートの敬けんな姿がうかがえる。

落下と上昇、人間の肉体の死と魂の復活という逆説的の主題は、ヘンリー・ヴォーンの『滝』(Water-Fall)という詩にも見事に表わされている。

With what deep murmurs through time's silent stealth
 Doth thy transparent, cool and watery wealth
 Here flowing fall,
 And chide, and call,
 As if his liquid, loose retinue stayed
 Ling'ring, and were of this steep place afraid,
 The common pass
 Where, clear as glass,
 All must descend
 Not to an end:

But quickened by this deep and rocky grave,
Rise to a longer course more bright and brave.
Dear stream! dear bank, where often I
Have sat, and pleased my pensive eye,
Why, since each drop of thy quick store
Runs thither, whence it flowed before,
Should poor souls fear a shade or night,
Who came (sure) from a sea of light?
Or since those drops are all sent back
So sure to thee, that none doth lack,
Why should frail flesh doubt any more
That what God takes, he'll not restore?

(10

「時の静かな流れ」(time's silent stealth)の中をなめらかに流れていく川は、いつの間にか過ぎ去っていく人生の象徴であるが、人間の死の象徴である滝にさしかかり、轟音とともに滝つぼめがけて落下していく。しかしこの死を表わす落下は、決して避けることのできない人間の「共通の道」(The common pass)ではあるが、それが全ての終わりという意味ではない。死という一瞬の神秘的空白の後に滝つぼの岩にあたった水は、水煙となって湧き上がり、太陽の熱によって蒸発する。そして雲となり、また雨や雪となって地上に落ちてくるのである。この水の循環運動は、光の海から地上に流れて来た魂がまた天上に回帰していくことを象徴している。ヘルメス思想特有の神秘的自然観によって、ヴォーンは死と復活という逆説的問題を見事に表わしている。

死という問題は、ダンの恋愛詩では遊戯的、または知的な扱い方をされることが多かったが、宗教的作品では、当然の事ながら深刻な扱い方をされている。『聖なるソネット』(Holy Sonnets)はルイス・マーツが指摘するように、「黙想法」の影響を受けた作品であるが、その「黙想法」における想像力の働かせ方の一つである「場の設定」により、死が現実に目前に迫ったものとして臨場感あふれる扱い方をされている。

例えば1635年の追補ソネット一番では「主よ、あなたは私を創造された。それなのにあなたの創造物が減びるのでしょうか。今私を修復してください。というのも今や私の終わりが早まり、私は死に向かって走り、死も同じくらいの速さで私に向かって走って来るのです」

Thou hast made me, And shall thy worke decay?
Repaire me now, for now mine end doth haste,
I runne to death, and death meets me as fast

(11

と'haste', 'runne', 'meets me as fast'等、速度感を表わす表現の多用によって、死への切迫した気持が表わされている。

また1633年版のソネット二番では、「ああ、私の黒く汚れた魂よ、今お前は死の使者であり、チャンピオンである病気に召喚されている」

Oh my blacke Soule! now thou art summoned
By sicknesse, deaths herald, and champion;

と法廷に呼び出され死の判決をうける罪人のイメージで死の恐怖が表わされている。

同じく1633年版のソネット三番では、「これが私の劇の最後の場面、ここに天は私の旅の最後の一マイルを定める。怠惰に、しかしあつという間に過ぎ去ってしまった私の人生は今最後の歩みに到る。指を広げただけのわずかの長さの最後の一インチ、一分の一番最後の点」

This is my playes last scene, here heavens appoint
My pilgrimages last mile; and my race
Idly, yet quickly runne, hath this last pace,
My spans last inch, my minutes last point,

と伝統的な人生を表わすメタファー、「劇」(playe)、「旅」(pilgrimage)、「競争」(race)が最後の「場面」(scene)に、最後の「一マイル」(mile)に、最後の「歩み」(pace)に、さらにはかないつかの間の人生を表わす「わずかの長さ」(span)、「一分」(minute)が最後の「一インチ」(inch)、「最後の「一点」(point)というように、距離的にも時間的にも限りなく終わりに近づいているさまが表わされている。特に「最後の」(last)という言葉の繰返しは早鐘のような劇的緊迫感をつくり出している。

前に引用したハーバート、ヴォーンの詩では、死と復活が下降運動、上昇運動という形で表わされた。ダンの場合この限りなく終わりに近づいた状態(My spans last inch, my minutes last point)が最初の起点に戻るかどうか、そして永遠性を表わす円となるかが最後の問題となろう。

晩年のダンが死を覚悟したといわれる重病をもとにして書かれた散文作品、*Devotions*の中に次のような一節がある。

As hee that would describe a *circle* in paper, if hee have brought that *circle* within one *inch* of finishing, yet if he remove his *compasse*, he cannot make it up a perfit *circle*, except he fall to worke againe to find out the same *center*, so, though setting that *foot* of my *compasse* upon *thee*, I have gone so farre, as to the *consideration* of my selfe, yet if I depart from *thee*, my *center*, all is unperfit.

(12)

「紙に円を書こうとするものが、あと一インチで円ができあがるというところまできても、コンパスを放してしまえば完全な円をつくりあげることにはできない。彼がその同じ円の中心を見つけて作業にとりかかるのでなければ。それと同じように、私のコンパスの軸を神である御身の上に私は置いたのだけれども、私は遠く離れて私のことだけ考えるようになってし

まった。もし私が私の中心である御身から離れてしまえば、全ては不完全である。」自分のことを考えること（the consideration of my selfe）という言葉は通時的に見れば、ダンの自己中心主義、またはエマーソン流の「自己依存」（self-reliance）という、初期の恋愛詩に見られる囲われた円を表わすものだろう。病床にある今という時点で見ればそれは生命への執着を表わしているように思う。死への不安と恐れ、救いを求めての神への熱い祈りの中で揺れ動くダンの極めて人間的な側面が *Devotions* の特色でもある。有名な「人間は島ではなくて大陸の一部である」に始まる一節も、ダンの地上の生命への限りない愛着を表わしていると解釈できる。しかしそれはやはり中心であるべき神からコンパスの軸がはずれてしまうことであり、始まったところで終わる円とはならないのである。この永遠性を表わす円が完全なものとなるかどうか、その最後のインチにダンの最後の挑戦と冒険があるように思う。

同じく晩年の重病をもとにして書かれた詩、『私の神への賛歌 — 私の病気の中で』（*Hymne to God my God, in my sickness*）では医者や地理学者に、病床にある自分を地図に喩え、‘strait’の「苦しみ」と「海峡」という二重の意味を巧みに利用して、病気を「苦しみ」という「海峡」を通っての死への「南西航路」（South-west discoverie, — ‘south’は熱病の熱、‘west’は死を表わす）と捉えている。

Whilst my physitions by their love are growne
Cosmographers, and I their Mapp, who lie
Flat on this bed, that by them may be showne
That this is my South-west discoverie
Per fretum febris, by these streights to die,

そしてこの西回りの航海に出て帰って来た者は誰もいないけれど、どうして西を恐れる必要があるのか。というのも西と東は平面地図では両端にあつて遠く離れているけれども、ぐるりと地球儀の上に回せば一つになるではないか、と円のイメージを使って死が復活につながることを表わそうとしている。

I joy, that in these straits, I see my West;
For, though their currants yeeld returne to none,
What shall my West hurt me? As West and East
In all flatt Maps (and I am one) are one,
So death doth touch the Resurrection.

人をあつといわせる着想、そして詩の見事な論理性はこの晩年の詩でも衰えをみせていないが、ここでは論理の核になる「円」が隠されてしまっていること、少し機械的な処理になってしまっていることにダンの復活への不安を指摘することができるかもしれない。西と東が一つになるかどうか、死が復活につながるものかどうか、始めと終わりが一つになって永遠の円となるかどうか、それはダンにも、生命ある者誰にもわからないことである。しかし死という海に一航海者として勇敢に旅立って行こうとするダンの気迫は読者の胸を打たずにはおかないだろう。

結び

これまで(1)始めと終わりが一つになるもの、(2)始めと終わりが一つにならないもの、(3)始めと終わりが一つになるかどうかかわからないもの、というダンの詩に表わされた三つの円をとりあげ、ダンにおける時間と永遠の問題を考察してきた。このような円の軌跡の相違は、別の角度からみれば、円の中心の相違ということもできる。(1)では円の中心は恋人同士であり、それは現実世界の圧力を強く感じながら、現実世界内楽園を志向したものであることができよう。(2)は天動説から地動説へという、天文学上の新発見により、地球が宇宙の中心ではなくなったこと、つまり円の中心の喪失ということができよう。それは世界そのものであったエリザベス・ドルアリの死によって象徴的に表わされている。さらにそのことは、現実世界、そしてその中心である宮廷への道を閉ざされたダンの挫折感と、現実世界の中に絶対的価値を見いだせなくなった彼の精神的失意を表わしているように思う。(3)の円の中心は神である。そしてダンの罪の意識、死への恐怖が、円の最後の一寸に激しい劇的緊張を生じさせているように思う。このような円の中心の変化は、世俗的なものから宗教的なものへの変化であり、結局のところ、一般的によくいわれる Jack Donne から Dr. Donne へという、ダンの詩的、精神的発展を再確認するとどまるものかもしれない。しかしこのようなダンの全体像は別にして、ここで再度強調しておきたいことは、ダンが永遠の象徴として円を用いる時、そこに「始め」と「終わり」という表現が多用されているということである。

This, no to morrow hath, nor yesterday,
Running it never runs from us away,
But truly keeps his first, last, everlasting day.

上の引用は『唄とソネット』の中の『周年記念』(*The Anniversary*)の第一スタンザ、終わり三行である。二人の男女が愛し合うようになって一年の時が経った今、この二人の愛は永遠に続くものであると力強く表現されている。この「変化しながら、変化せず、最初で、最後の、永遠の一日を持続する」という表現、それは図形的に表わせばまさに円であり、「最初」(first)と「最後」(last)が結びついた時「永遠」(everlasting)となるのである。

La Corona は七つのソネット連作から成る、キリストの地上での一生を表わした詩であるが、各ソネットの最終行が次のソネットの最初の一行となり、最後のソネットの最終行がまた最初のソネットの最初の一行となって、全体として緊密な円環を形成している。そしてこの円環を成す詩形は、ダンの神への「祈り」を表わす「ロザリオ」と、神の栄光を賛える「王冠」の象徴ともなっている。さらにこの円環は「変化しながら、変化せず、日々の最も旧き者」(All changing unchang'd Antient of dayes)である神の永遠性、聖書にいう「アルファーにしてオメガ、始めにして終わり」である神の永遠性を表わしているといえる。

notes

- 1) Helen Darbishire ed., *The Poetical Works of John Milton*, (Oxford University Press, 1962) Book VII, 11. 224–231
- 2) Alan Rudrum ed., *Henry Vaughan The Complete Poems*, (Yale University Press, 1981)
- 3) W. G. Ingram and Theodore Redpath ed., *Shakespeare's Sonnets*, (University of London Press Ltd., 1964)
- 4) T. S. Eliot, *Selected Essays*, (Faber and Faber, 1932) p.283
- 5) Marjorie Hope Nicolson, *The Breaking of the Circle*, (Columbia University Press, 1960)
- 6) Helen Gardner ed., *The Elegies and the Songs and Sonnets of John Donne*, (Oxford University Press, 1965)以下、『唄とソネット』の引用は全てこの版による。
- 7) Izzak Walton, *The lives*, (Oxford University Press, 1640)
- 8) W. Milgate ed., *John Donne the Epithalamions Anniversaries and Epicedes*, (Oxford University Press, 1978)以下、『周年記念』の引用は全てこの版による。
- 9) F. H. Hutchinson ed., *The Works of George Herbert*, (Oxford University Press, 1945)
- 10) *Henry Vaughan The Complete Poems*, *op. cit.*
- 11) Helen Gardner ed., *John Donne The Divine Poems*, (Oxford University Press, 1952)以下、ダンの宗教詩の引用は全てこの版による。
- 12) Anthony Raspa ed., *John Donne Devotions Upon Emergent Occasions*, (McGill-Queen's University Press, 1975) Expostulation 20

(昭和60年10月11日 受理)